

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選 その45

文：矢部 征男

奥川近代化へのシンボル 2つの水力発電所

奥川は飯豊山を水源とし、阿賀川に合流する長さ20kmあまりの水量豊かな河川です。

その阿賀川との合流地点付近の溪谷に2つの水力発電所があります。およそ100年前に建設され、今も稼働を続ける歴史ある発電所です。奥川第一発電所（最大出力1,000kW）は大正9年（1920）に完成しました。発電所の上流部にダムを建設し、そこから岩山をくり抜いて約600mの水路を通り約39mの落差を利用した発電所です。さらに大正10年（1921）にはこの水路を延長し、約20mの落差を利用して奥川第二発電所（最大出力560kW）が建設されました。

会津地方では、明治34年（1901）に建設された東山発電所が最も古いといわれていますが、大正時代初め頃の日本では繊維工業の近代化や化学工業が発達し、電灯以外にも電力需要が高まっていたのです。猪苗代湖から流れ出る日橋川^{にっぽしがわ}を利用した大きな水力発電所が建設されたのもこの時期であり、東京方面へと送電されています。

奥川に発電所が建設されたことで、弥平四郎・大舟沢集落を除く奥川地区全家庭に、「十燭灯^{じっしょくとう}（“燭”は昔の明るさの単位、約15Wの明かりのことで家庭用としては暗い）」1個の制約はありましたが、初めて電灯が灯されました。また、この電力を利用して徳沢地区に化学工場を建設する計画もありましたが、実現には至りませんでした。

また発電所のダム建設により、それまで行ってきた漁業や川を利用する木材運搬に影響が及ぶとして、当時奥川村議会ではその補償を求める決議をしています。

この後、昭和時代初めには世界的な経済的不況や豪雪などの自然災害も重なり、豊富な電力を活用する地区の発展は叶いませんでしたが、近代化を目指した貴重な「遺産」として記憶したい1つといえるでしょう。

（参考文献『西会津町史第5巻下』）



今月の表紙

今月は、新年の干支「丑^{うし}」にちなんで、畜産を営む三瓶純一さん（山浦）にご協力いただき、親子の牛を撮影しました。少なくともいましたが町内にも畜産に勤しむ農家があります。親子そろって仲良く餌を食べる様子が印象的でした。



編集後記

明けましておめでとうございます。令和3年が皆さんにとって、昨年よりもモウっつと良い1年になりますよう、心よりお祈りいたします。

令和2年もあつという間に過ぎました。4月から広報紙担当となり、本号で早くも9冊目。令和3年も気軽に手に取っていただける広報紙作りを心掛け、健康第一で頑張りたいと思います！（秦）